**〔解　説〕**宝暦元年（一七五一）十二月、豊竹座初演。並木宗輔（千柳）・浅田一鳥・浪岡鯨児（なみおかげいじ）・並木正三らの合作。「平家物語」「源平盛衰記」を基に、敦盛（あつもり）最期と忠度（ただのり）都落を中心に脚色したもの。三段目までは並木宗輔が書いたがこの段が絶筆となり、その後は一鳥らが完成させた。

**〔ここまでのあらすじ〕**源義経は、家臣、熊谷次郎直実に弁慶筆の「一枝を切らば一指を切るべし」と書かれた制札（立て札）を渡し、熊谷は我が子小次郎と共に出陣する。一谷の合戦では、小次郎と平山武者所が先陣争いをするように斬りこんでゆく。後から駆けつけた熊谷は、負傷した小次郎を陣屋（軍兵の詰め所）へ連れ帰る。その後、平家の陣内から大将敦盛が現れ、逃げる平山を追って行く。その頃、敦盛の許嫁玉織姫（たまおりひめ）は敦盛の姿を求めて須磨浦をさまよう。そこへかねてから姫に横恋慕する平山が近付き、我が意に従わせようとするが、靡かぬのに腹を立てて姫に刃を向ける。

**〈組討の段〉**一方、敦盛は平山を見失い、ひとまず沖の味方の船へ戻るため、馬を泳がせるが、熊谷が勝負を挑んで呼び止める。二人は馬上で打ち合い、互いに馬から落ちた時、熊谷が敦盛を組み敷く。熊谷は敦盛に、思い残すことがあるならかなえてやろうと情けをかけるが、敦盛は自分の死骸を父に届けて欲しいとだけ頼む。健気な振る舞いに心打たれた熊谷は、助けてやろうとするが、それを平山に責めたてられ、進退極まってついに首を討つ。そこへ瀕死の玉織姫が這い寄り、見えぬ目で敦盛の首と名残を惜しみつつ息絶える。熊谷は無情を悟り、敦盛の首を抱いて帰路につくのであった。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　　　　　　　　　　　　　　　（一般社団法人　義太夫協会発行）

**組討の段**

　去る程に、を始めて、一門皆々船に浮かめば乗り後れじと、に打寄れば、も兵船も、遙かにのび給ふ。

無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ、御座船に馳着いて、父経盛に身の上を告げ知らすことありと、須磨の磯辺へ出でられしが、船一艘もあらざれば波に駒を乗入れ、沖の方へぞ打たせ給ふ。かゝりけるところに後より、熊谷次郎直実。

「ヲヽイ〳〵」

と声をかけ駒を早めて追っかけ来り、

「ヤアそれへ打たせ給ふは平家の大将軍と見奉る。なうも敵にうしろを見せ給ふか引返して勝負あれ。かく申す某は、武蔵ノ国の住人熊谷次郎直実見参せん返させ給ヘ」

と、扇を上げて指招き、

「暫し〳〵」

と呼ばはったり。

敵に声をかけられて何か猶予のあるべきぞ、敦盛駒を引返せば、熊谷も進み寄り、互ひに打物抜きかざし、朝日に輝くの稲妻かけ寄り、かけ寄せちゃう〳〵〳〵、蝶の羽がへし、駒の足並かっしかっし。かしこは須磨の浦風に鎧の袖はひら〳〵〳〵。群れゐる千鳥村千鳥むら〳〵ぱっと、引汐に、寄せては返り、返りては又打ちかくる虚々実々。勝負も果てしあらざれば、

「いそふれ組まん」

と敦盛は打物からりと投げ給へば、

「コハしほらし」

と熊谷も太刀投げ捨てゝ駒を寄せ、馬上ながらむずと組み

「えい」

「えい」

「えい」

の声の内、互ひに鐙を踏みはづし両馬が間にどうど落つ。すはやと見る間に熊谷は敦盛を取って押へ、

「かく御運の極る上は、御名を名乗り直実が高名誉を顕はし給へ。又に何事にても思ひ残す御事あらば、必ず達し参らせん。仰せおかれ候へ」

とろに申すにぞ。敦盛御声爽かに、

「ヲヽやさしき志。敵ながらあっぱれ勇士、かく情ある武士の手にかゝり死せんことの面目。戦場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、かねてなき身と知るゆゑに、思ひおくこと、更になし。さりながら忘れがたきは父母の御恩。我討たれしと聞き給はゞ、さぞ御歎き思ひやる。せめて心を慰むため、討たれし跡にて我が死骸、必ず父へ送り給はれかし、我こそ参議経盛の、無官の太夫敦盛」

と、名乗り給ひしいたはしさ。木石ならぬ熊谷も見る目涙にくれけるが、何思ひけん引起し鎧の塵を打払ひ〳〵、

「この君一人助けしとて勝軍に負けもせまじ、折節外に人もなし。一先づこゝを落ち給へ。早う〳〵」

といひ捨てゝ立別れんとするところに、後の山より武者所の軍兵。

「ヤア〳〵熊谷。平家方の大将を組敷きながら助くるは二心に紛れなし。きゃつめ共に遁すな」

と声々に罵るにぞ、熊谷ははっとばかり、『いかゞはせん』とたり。敦盛卿しとやかに、

「とても遁れぬ平家の運命。こゝを助かり行先にて下司下郎の手にかゝり、死に恥を見せんより早く御身が手にかけて、人の疑ひはらされよ」

と、西に向かひて手を合はせ、御目を閉ぢて待ち給へば、いたはしながら熊谷は御後ろに立ち廻り、弥陀の利剣と心に唱名、ふり上げは上げながら、玉の様なる御粧ひ。『情なや無慚や』と、胸も張り裂く気後れに、太刀ふり上げし手も弱り、思ひにかきくれ討ちかねて、歎きに時も移るにぞ、

「アヽ後れしか熊谷。早々首を討たれよ」

と、捻ぢ向き給ふ御顔を見るに目もくれ心消え

「忰小次郎直家と申す者丁度君の年恰好。今朝軍の先駆けして薄手少々負うたる故、陣屋に残し置きたるさへ心にかかるは親子の仲。それを思へば今こゝで討ち奉らば、嘸や御父経盛卿の、歎きを思ひ過ごされて」

と、さしもに猛き武士も、そゞろ涙にくれゐたる。

「アヽ愚かや直実、悪人の友を捨て、善人の敵を招けとはこの事。早首討ってなき後の回向を頼むさもなくば、生害せん」

とすゝめられ、

「アヽ是非なし」

とつっ立上り

「順縁逆縁倶に菩提、未来は必ず一蓮託生」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

首は前にぞ落ちにけり。人の見る目も恥づかしと、御首をかき抱き、くもりし声を張り上げて、

「平家の方に隠れなき、無官の太夫敦盛を熊谷ノ次郎直実討ち取ったり」

と呼ばはるにぞ、磯に伏したる玉織姫、絶え入りし気も一筋に、夫を慕ふ念力の、耳に入りしかむっくと起き

「ノウ暫し待ってたべ。敦盛様を討ったとは、いかなる人かなふ恨めしや。せめて名残に御顔を、一目見せて」

と云ふ声も、深手に弱る息遣ひ。見るより熊谷御首携へ歩み寄り、

「敦盛を慕ひ給ふはいかなる人」

と尋ぬれば、今際の苦しき声音にて、

「我こそは敦盛の、妻と定まる玉織姫。お首はどこに。ヱヽもふ目が見えぬ」

と撫で廻せば、

「ムヽ何、お目が見えぬとや。ヲヽいとしやいとしや。御首はコレ、コレこゝに。こゝに」

と手に渡せば、わっと泣く泣くしがみ付き、顔に当て身に添へて、思ひの限り声限り、泣く音は須磨の浦千鳥。涙に浸す袖の海、引く汐時と引く息の、知死期と見えて絶え果てたり。是非もなくなく玉織の、亡骸を取り納め、をほどいて敦盛の御死骸を押包み、取って引き結び、手綱を手繰り結ひ付ける。鞍の塩手やしをしをと。に御首携へて、右に轡の哀れげに、のうき別れ、太子を送りたる、童子が悲しみも、同じ思ひの片手綱、涙ながらに　　　　　　　　　　　　　　（帰りけり。）

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。